優秀賞

父と私をつなぐ水

会津若松市立一箕中学校　三年　佐藤（さとう）　空成（そな）

「水」と聞いて私が真っ先に思い浮かべるのは、父の存在だ。

　今の日本は蛇口をひねるだけで、安全でおいしい水が出てくるのが当たり前だ。しかし、世界では、安全な水が手に入らない国の方が多いと言われている。だからこそ、私達は水を大切に、そして、感謝しなければならないものだと知っているはずだ。しかし、私にはもう一つ知ってほしいことがある。それが、私の父の存在だ。

　私の父は、福島県の大川ダムで働いている。大川ダムでは、災害を防ぎ、私達の生活に欠かせない飲み水や、農業用水を蓄えている。他にも、水力発電を行い、私の住む会津若松市や、東北、東京にも電気を送っている。私の父は、

「皆にとってなくてはならない仕事なんだ。」

と、教えてくれた。父は自分の仕事にやりがいを感じ、責任をもって仕事をしている様子を、その時強く感じた。そんな仕事をする父を、私は誇りに思う。しかし、たった一度だけ、父が働く理由が分からなくなってしまったときがあった。

　二〇一九年、十月十二日、台風十九号が、日本列島を直撃し、日本に甚大な被害をもたらしたことを、覚えているだろうか。その時、福島県は、大雨特別警報が発表され、雨が地面を叩き付ける音が響き、木が倒れてしまいそうなくらいの強風が吹いていた。そんな中、父は大雨で川が氾濫しないよう、ダムへ向かった。こんな時に出かける父を見送って、私は不安で押し潰されそうだった。父が留守の今、長男である自分が家族を守らなくてはいけないと分かっていた、分かっていたが、心の中では父が

私のそばにいてくれたら、どんなに安心だろうなどと思っていた。父が皆のためにしている仕事を、皆は知っているのだろうか。父は大丈夫だろうかと心配で仕方がなかった。しかし、いつでも避難ができるよう、準備をするために歯磨きをしようと思った。歯磨きをするために蛇口をひねった。いつもと何一つ変わらない水、そう思っていたが、そのときは何かが違うような気がした。私はすぐに、それが何か分かった。同時に、なぜ今まで気付かなかったのだろう、とも思った。蛇口から出てくる水は、ずっと私と父をつないでくれていたのだ。父が私達のためにダムに蓄えて置いてくれた水が、蛇口をひねることで、私のもとへ届く、そう気付いたとき、私は一人ではないと思えた。今、父は私達の命を守るために必死に働いてくれている。ならば、私も何かしなければならない、そう思い、力強く蛇口をしめた。

それからも、何度も何度も、記録的な大雨が日本を襲った。その度に、父は休みであろうと、仕事へ向かう。そして、私はその度に、父を尊敬する。

私にとって水は、父の思いやりが詰まった大切なものだ。それは、私だけではなく、日本国民全員に共通することだと思う。だからこそ、水を無駄にしてはいけないのだ。ただの水かもしれないが、そのただの水には、ダムや浄水場などで働く人達の思いやりや願いが込められている。そのことを、私はもっと多くの人に知ってほしい。今まで私は、水を大切に扱い、感謝してきた。それ以上、自分にできることは何もないと、勝手に決めつけていた。しかし、今の私は、中学生の私だからこそできることに気づかされた。それは、水に感謝できるのは、誰かの努力があるからだということと、水を大切にできるのも、誰かが大切にできるような存在の水にしてくれたからだということを、この作文を通して、いろいろな人に発信していくことだ。

新型コロナウイルスから日常を取り戻すために、これからも水で手を洗おう。そうすれば、明るい未来がやって来るだろう。大雨の後、空に大きな大きな虹が架かるように。